

II-471

家庭における消費財の消費傾向の分析

京都大学工学部 学生員 大森友也
正 員 寺島 泰

1. はじめに

都市廃棄物の発生構造のうち、家庭系廃棄物の発生構造の分析を進めるにあたっては、家庭において廃棄物が発生する過程を十分に考慮する必要がある。家庭における廃棄物発生は、さまざまな消費財を消費した結果として起きる。家庭における消費財の消費の過程は廃棄物発生過程そのものではないが、互いに非常に密接な関係があり、家庭における消費財の消費の傾向を明らかにすると、そこから家庭系廃棄物の発生を把握することが可能となると考えられる。そこで本報では、家庭における廃棄物発生の原因である、消費財の消費傾向について検討した。なお本報では、家庭における消費の基礎資料として、家計調査年報及び家計調査総合報告書を使用した。

2. 家計消費を特徴づける世帯属性

家庭における消費はそれぞれの家計単位すなわち世帯ごとに把握される。このような世帯ごとの消費の傾向はランダムなものではなく、その世帯のさまざまな特性、例えば世帯人員数や収入などによる影響を強く受けていると考えられる。このように世帯を特徴づける特性を一般的に世帯属性と呼ぶ。世帯属性は以下のように分類できる。

①世帯構成を表すもの

・世帯人員・年齢構成・世帯主年齢など

②社会・経済的地位や状態を表すもの

・収入・支出・世帯主の職業・住居の有関係など

③その他

・ライフスタイル・社会的意識など

表1 主な世帯属性の実態（1992年）

世帯属性	1992年	1984年	1976年
世帯人員[人]	3.53	3.72	3.84
有業人員[人]	1.62	1.56	1.57
世帯主年齢[歳]	50.0	46.9	44.3
年間収入[万円]	722	514	307

このように、家計消費に大きな影響を及ぼす因子は大きく分けて世帯構成、社会・経済的因子、世帯を構成する人の意識があると考えられる。

3. 消費財消費の現況

家計調査年報平成4年版によると、全国の2人以上世帯の平均世帯属性は表1のようになっている。また消費支出の用途別内訳は図1のようになっている。このように食料購入額は全体の4分の1を下回り、交通・通信費、教育費、教養娯楽費、その他の消費支出で全体の半分以上を占めている。すなわち、消費支出全体における衣食住の占める割合はかなり低くなっている。

次に支出の内訳を財サービス区分別にみたも

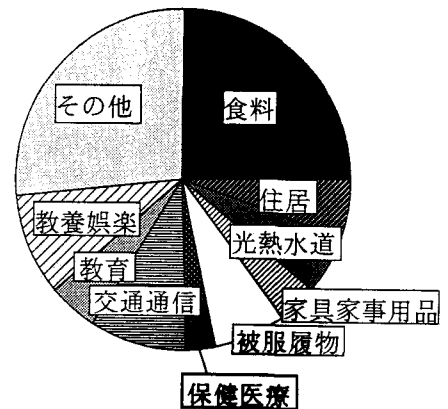


図1 消費支出の用途別内訳（1992年）

のが図2である。これを見ると、時代とともにサービスの割合が増加し、非耐久財の割合が減少している。これらの傾向から、近年の家計消費にはかなりゆとりができていることがわかる。

4. 消費財消費と世帯属性との相互関係

次に、図3に世帯属性のうち、世帯人員・世帯主年齢・年間収入について、消費支出との関係を検討した。例えば、穀類購入額とそれぞれの世帯属性との関係を見ると、世帯人員に対しては直線的増加の傾向を示し、世帯主年齢に対しては一度増加してから減少する傾向を、年間収入に対しては増加するが、徐々に増加率が減少する傾向を示している。この傾向は、穀類の消費特性をよく反映していると考

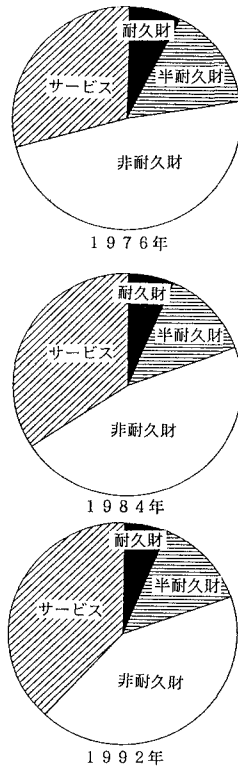


図2 消費支出の財・サービス分類別割合

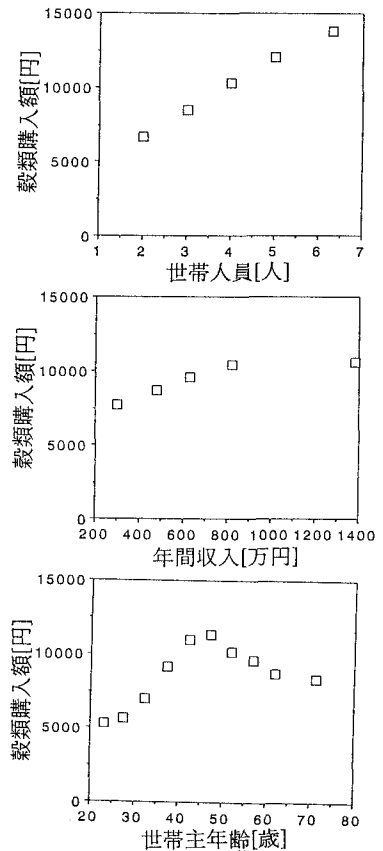


図3 穀類の一ヵ月あたりの購入額と各世帯属性との関係

えられる。すなわち、穀類は世帯構成員一人一人についてある程度一定量が必要であり、しかも、収入が高くなっても、販売価格差があまり大きくないために、購入額があまり増加しない。また、世帯主年齢に対する購入額の変化は世帯主年齢に対する世帯人員数の変化を反映している。これに対して、他の品目に対しては、また別の消費特性がある。このように、消費財の消費はその品目の消費の特性ごとに、強く影響を受ける世帯属性が異なっており、さらに世帯属性と購入額との相互関係も、品目の消費特性ごとに異なっている。

5. まとめ

以上に述べたように、家庭における消費財の消費は全体的にゆとりが広がる傾向にあり、多様化が進んでいる。また、世帯ごとの消費の傾向は世帯属性によって大きな影響を受けるが、その影響の大きさや相互関係は世帯属性ごと、消費品目の消費特性ごとに異なっている。従って、消費の傾向から廃棄物発生にアプローチしようとする場合、このような消費特性のバリエーションを考慮することが必要である。

参考文献：＜家計調査年報 平成4年＞総務庁統計局、1993年

＜家計調査総合報告書 昭和22年～61年＞総務庁統計局、1988年